円盤と宇宙哲学の研究誌

日本GAPニューズレター

1964

3月-4月

日本ＧＡＰニューズレター

—１９６４—
3月・4月号目次　　通巻第21号

宇宙的真理と個人的真理 …… Ｇ・アダムスキー　1
時代と反逆者 …… Ｃ・Ａ・ハニー　8
資疑応答 …… 〃　11
女予言者の見た一九六四年 …… Ｒ・モントゴメリー　12
新しい概念を評価せよ …… Ｃ・Ａ・ハニー　14
生活への助言 …… Ｊ・クリシュナムルティー　19
テレパシー講座　3 …… Ｃ・Ａ・ハニー　25
編集後記 …… 33

宇宙的真理と個人的真理

G・アダムスキー

変動を恐れるな

先般の〝最近の情報〟を発表してから（注・本誌今年一月・二月号に掲載）、私はまた〝ブラザーズ〟に会いました。以下は彼らが与えてくれたニュースです。

数年前、地球の科学者は太陽の磁極が逆転したことを発表しました。このため太陽系全体が太陽に従って変化しつつあります。それは太陽系内の全惑星に影響を与えています。それがどの程度かはわかりません。太陽系の終滅期に近づいているのか、それとも単に部分的な変化なのかはまだ確かめられていません。

この変化によってひき起こされた不安な空気は地球のような程度の低い惑星上の人間の心に影響を及ぼしていますし、これは地球人のあいだに不安な状態が起こる理由となっています。こうしてカタストロフィー（大変動）の発生説や戦争勃発の噂などがひろがっていますが、これは人類による宇宙の法則の開発または理解の欠乏によるものです。しかしこれは太陽系が消滅しかかっていることを意味するものではありません。少なくとも宇宙船内で用いられている装置類は現在このことを記録してはいないということです。

これまでの二万六千年間に（これは一サイクルなのですが）、太陽系は五十六兆マイル動きました。これは太陽系が二万六千年前に存在した場所と同じ位置にいないことを意味します。

あらゆる太陽系には始まりと終わりがあります。聖書の言葉でいえば太陽系は〝天〟です。そしてこれはイエスが「天と地とは消滅するだろう。しかし新しい天と地がそれにかわって出現するだろう」といっている言葉の意味を説明します。この現象が発生する正確な日時はだれにもわかりませんし、宇宙人にさえもわかりません。このことは地球ばかりでなくこの太陽系内の全惑星団にあてはまります。

太陽系をも含む宇宙の万物は活動していて、各自の運命の遂行に向かって動き続けています。なぜならもろもろの結果が現われては消えますが、結果の背後にある英知は働き続けるからです。

かつて述べましたように、宇宙人のすべてが他にたいする意図において慈悲深いとは限りません。最近（今年一月）テキサス州ダラスで、一かたまりの金属が空中から落下して家屋の一部を破壊しました。この事件は多くの人によって目撃され、地方の新聞が報導しました。ところで私は、この金属は地上のものではなく、敵対的な宇宙船と出会った一宇宙船から落とされたものであるという情報を受けとりました。この場合、友好的な宇宙船は相手から攻撃を受けたのです。しかしこの宇宙船は基地へ帰り着いて、

ケガ人はなかったということです。

われわれは時がたつにつれて宇宙の遭遇戦に関し多くを聞くでしょうが恐れる必要はありません。宇宙のよき友がいるからです。

今日の科学

月へ向かって飛んで行ったレインジャー六号は、果たしてそのカメラ（複数）がだめになったのでしょうか。この問題には疑問があります。というのは当初われわれはレインジャーのカメラ群によって撮影された写真は世界に公表されると聞かされていたからです。しかるに月面に衝突する少し前に写真は公表されないことになったという声明が出されました。なぜでしょう？　もし科学者が写真の公開を望まなかったとすれば、彼らの最上の逃げ道はカメラ群が作動しなかったと述べることにあります。衝突の十分前にカメラ群が作動しなくなることをどうして彼らは知ることができたのでしょう。

しかもレインジャー六号には六個のカメラが装備してありました。なぜそれらが同時にストップしたのでしょう？　与えられた情報によれば、各カメラは別々に電気装置を持っていたということです。

撮影にたいする興味と興奮と不安は大変なものでした。しかも実験に関係した科学者はカプセルから直接に撮影される写真を公開することを約束したのです。しかし科学界の上層部は米国の教育機関に起こるかもしれない騒ぎを考慮して、実験内容を秘密にするように命じました。写真が発表されれば天文学界のいわゆる権威者を失墜せしめるかもしれないからです。そして月は死の世界であって人間はいないのだという従来の説が誤っていて、実際には人間がいることを知らせることになるからです。写真が公表されたとしても私の説による光景とは少し異なる場面を示しているかもしれませんが、人間がいることを間違いなく写し出すでしょう。また他の惑星の人間が月に保有している多くの基地をも示すでしょう。しかも写真というものは言葉よりもはるかに真実性を持っているのです。

もしその月面写真が公開されたとすれば、教育界の大反乱が世界中に起こり、現代の最新の知識よりも三十年も遅れている学説のかわりに新しい教科書をよこせと大衆は騒ぎたてるでしょう。惑星、月などを研究する多数の権威者は大衆から無能者扱いされるでしょう。そこで彼らは自分たちや他の権威者の面子をたてるために何をやったかを自ら暴露せざるを得なかったのです。

彼ら権威者はこの教訓をグレン中佐の〝宇宙空間におけるホタル火〟の報告から学びました。グレンが大気圏外を飛ぶよりも数年前に私が〝空飛ぶ円盤同乗記〟中で述べた宇宙空間の光景を彼ら権威者が事実と信じていたならば、グレンが大気圏外で目撃した光景について「何もしゃべるな」と命じたことでしょう。この体験にかんがみてグレン以後の宇宙飛行士にたいしては口止めがしてあります。しかしグレンはいまや国家的英雄ですから、簡単に無能者扱いされることはありません。

地球人が大気圏外へ何を送り出そうとも、当分のあいだ一般人は絶対的な真相を知らされることはないと考えてよいでしょう。これには多くの理由があります。打ち上げの責任者たちが自己の

見解について自信を持つようになり、離陸から着陸までの大気圏外飛行のすべてをテレビで放送でき、カプセルと地上間の連絡が確保できて、宇宙飛行士が目撃する光景を自由に語ることができるようになれば、一般人にも真相がわかるでしょう。

権威者がもしレインジャー六号の撮影した写真を公開したならば、月の植物や住居などが示されたと思います。月は目下〝建築ブーム〟だといっても過言ではないでしょう。

聞くところによりますと、米国は再び実験を行なうということです。この次うまく写真がとれたとしても、果たして真実の写真を公開するでしょうか。それとも望遠鏡で見られる荒漠たる地帯だけを見せるのでしょうか。私にいわせればマリナー二号の場合と同様に、真実の報告がなされるとは思いません。

マリナー二号は金星の表面から二万二千マイルの距離に到達しました。この位置と表面とのあいだには厚さ数千フィートの雲の層があります。このためにこれまで金星の表面を撮影することは不可能でした。かりにマリナー二号が伝えられたような高い温度を実際に記録したとすれば、それは雲のフチに到達する直前に発生した摩擦によって起こったのかもしれません。もし雲を突き抜けて金星の表面に到着したとすれば、マリナー二号の観測装置は六十五度またはたぶん零度さえも記録したかもしれないというチャンスが九十九パーセントあります。というわけは雲は冷たいことをわれわれは知っているからです。そしてマリナーの記録した温度も低下したことでしょう。

そもそも、金星では人間の血液は沸騰するという説が真実であるとすれば、なぜ有人宇宙船を金星に着陸させようという計画をたてて、それに数百万ドルをつぎ込むのでしょう？　人間がそのような高温にたえられないとすれば、この計画に何の価値があるでしょう？　このことは、実際には地球の宇宙開発計画の専門家たちは真相をよく知っていて、しかもそれは一般人に決して洩らされなかったことを意味します。宇宙空間には多くの物事が起こっているのですが、大衆は知らされていません。

創造的科学

今日、科学者によって生命が探究されています。これまでに知られている文明が決して持ち得なかった知識の時代にわれわれは生きているからです。人間が生存し続けようとするのなら、そのためには人間の世界の感情に浮動しない、あらゆる分野に精通した、高度に発達した人を必要とします。このような人間になるために人は自由で寛容的であらねばなりません。

一方で人間は災難に直面し、他方では黄金の未来を持っています。このいずれを人間は選ぶでしょう？

現在の多くの状態は、世界の大多数の人間が精神異常者の道を歩み、狂気じみた感情に支配されていることを示しています。これは精神病院の患者のことをいっているのではありません。暴動、政府打倒、むやみやたらな大量殺人などに満ちた世界の現状をごらんなさい。こうした状態は爆発的な感情によってひき起こされているのであって、そこにはもはや理性などというものは存在しません。しかも狂気じみた行動といってよいこの種の感情は特定な階層の人々にだけあてはまるものではありません。なぜなら、

宗教界やその他あらゆる社会の人々がそれに関連しているからです。

すぐれた社会を建設する可能性のすべてを持つ米国においても狂気じみた感情が大衆の支配力となっています。どん欲、憎悪、不信があばれまわっていて、尊敬や礼節はもはや支配的な要素ではありません。故ケネディー大統領が暗殺されたのもこれらの力によるものでした。政治、精神主義、宗教と分類されてはいるものの、これらのあらゆる党派は右の力に加担しています。

党派の統合というのは彼らにとって逃げ道とはなりません。こんなことは容易に国家的または世界的な反乱に通じます。反乱を起こすには数名の人間をつついて大衆を扇動すれば充分であり、そうすれば理由を何ら知らされることなしに暴動は発生します。そしていわゆる精神主義の人々はそうでない人と同じくらい急速に自分を売ってしまうでしょう。

かかる状態のまだ存在しなかったころに大国を建設した分別ある人々の持っていた〝何物か〟を現代人は失ってしまったかのように思われます。それとも過去の憎悪と不正がいまになって現代人を支配しているのでしょうか。いまは世界の人々が立ち止まって自己を見つめるべき時です。

この文明を絶滅させるのは爆弾ではなく、憎悪、不信、他人にたいする尊敬感の欠乏です。創造者の法則は「他人からしてもらいたいと思うことを他人にせよ」であって、これこそいまの文明が黄金の収穫をあげることのできる唯一の法則です。

十戒はわれわれの前に置かれてきました。現在その十戒を守るための数百の法則をわれわれは持っています。しかしそのいずれも実際には十戒にそむいています。この文明を救うためにはただ一戒しか必要はありません。すなわち「自分が尊敬してもらいたいように他人を尊敬せよ」です。これがなされればわれわれは偉大な未来を持つことになり、安定して、神が意図したような人間になるでしょう。

科学者は多くの分野で働いていて、この文明で始めて彼らは生命の神秘を解明しようとしています。これは人間を長生きさせるのみならず、人間が過去の記憶を呼び起こすのを可能にするでしょう。そして夢想したけれども達成できるとは考えなかった、多くの物事に満ちた未来を理解する能力を人間に与えてくれるでしょう。

宇宙の英知は一つのコード・システムを持っていて、科学者は目下それを研究し、素人の言葉で翻訳しつつあります。いまやわれわれは、これまで地球人に知られていた何物にもまさるこの知識から恩恵を受けることができます。金星人や他の惑星人は長いあいだこの知識を有していました。

私は自然科学の或る研究団体に参画しています。それには人間がこれまでに作ったもののなかで最もすぐれた装置類を必要としました。しかしすべての科学者と同様に、彼らも単純な生命体に複雑な名称をつけています。

われわれは生命体を作り上げている細胞についてよく知っています。この細胞という言葉を聞くとき、一つの構成単位を思い浮かべますが、実際にはこの構成単位は生ける細胞のなかに存在するより小さな構成単位すなわち分子から成り立っています。各分子はその過去と現在の活動に関する正確な青写真を持ち運びます。

そして分子はそのたえまのない活動を通じて常に新しい状態にあります。

私がかつて〝テレパシー〟と題する書物を出したとき、私の生きているあいだに科学者が〝細胞間の信号の伝達〟の真実性を発見するであろうとは思いもよらないことでした。各細胞は多くの分子から成っていて、記憶のパタン（型）を持っています。各細胞がいつごろから記憶のパタンを持ったのかはだれにもわかりません。これら細胞は互いに知識を伝達し合うことができます。しかるにこうしたことはすべて化学の分野に入っています。このさまざまの分野を超えたもの—それが宇宙の基礎であるように思われます。

人間を創造した潜在力について考えてごらんなさい。そして人体が無数の細胞を含んでいる事実に気づくとき、人間に授けられた広大さを考えてごらんなさい。細胞は無数の分子から成る構成単位であり、各細胞は他の細胞に関して自分の活動の記憶を持っています。われわれは人体内に眠っている多数の記憶の単位を持っているのです。

人間は自己の内部の知識の宝庫に気づきさえすればよいのです。しかし人間の心が自らを〝意識〟にゆだねないかぎり、この宝庫を見い出すことはできません。なぜなら細胞を構成している分子は意識的な実体であって、精神的実体ではないからです。したがって利己的な人はそうした知識の研究者にならねばなりません。

この講座はこうした意識的な実体を応用する方法について述べてあります。読者がひとたびこれを学びとるならば、聖書に述べてあるように生命の主人公になるでしょう。そうすれば病気などは消滅し、いかなる種類の食養生などする必要はなくなります。なぜなら、そのとき本人は完全な人体の所有者になるからです。そして老衰することもなくなるでしょう。

この種のキーが、現在生命を部分的にもマスターしつつある人々によって地球人に授けられたのは、これが人間の歴史で始めです。私は、宇宙人が地球の科学者にこの最も重要な問題を認識する方法を伝えているのだといっているのです。

「陽性の態度は価値のあることか」とこれまで私は何度も質問を受けました。極端な陽性の態度は頑固ということになります。頑固というものはだれにとっても有益ではありません。

宇宙の原理の線にそってよい結果を得るためには、人間は等量の陽性と陰性とを持つ必要があります。陰性の態度は受容的であるからです。このどちらか一方が欠けていても悪い状態をひき起こし、その結果は死です。人間はこの一方が欠けたままで機能を果たすことはできません。

すなわち、男は陽性の側にありますが、もし陰性である女というものがいなかったならば、人間を作り出すことができず、やがて絶滅するでしょう。いいかえれば、現象というものをもたらすには等量の陽と陰を必要とするのです。電光は陽電気と陰電気のいずれが欠けても得られません。両方が結合する必要があります。生命のあらゆる現象もこれと同じです。よい結果を得るためには陽・陰の両方の法則が応用されねばなりません。人間はこの一方

一の態度だけを極端に持することはできないのです。もしそうすればきわめて不満足な生き方をするようになります。

あなたは生命のあらゆる面がこの二つから成り立っていて、われわれの肉体や他の生命体にもこの二つが働いていることがわかるでしょう。これは必要なことです。そうしないと細胞の再生も不可能になるからです。肉体の傷ついた部分の治癒も不可能になります。親和の法則とはバランスの法則です。

アンバランスな想念の影響

健康な肉体がどのようにして不健康な肉体に変わるかについて説明しましょう。

数年前、医者が見つけたかぎりでこの上ない健康だといわれる人にたいして実験が行なわれました。この人は自己の健康体を意識していて、しばしばそのことを語っていました。食欲も充分にあり、あらゆるものを食べて、体重は三ポンド以内の変化を示すだけでした。そこで医者連は彼をモルモットに使用することにし、彼の想念をアンバランスにするために本人の友人たちを利用したのですが、そのことは本人に内緒にしておきました。実験というのは、友人たちが本人に向かって「顔色がわるいじゃないか」と語りかけるのです。当初これは本人に影響を与えませんでしたが、一定期間実験が続けられたところ、本人は実際にひどい病気にかかって病院へ運び込まれることになりました。

予定の実験が終了してから、医者たちは本人の肉体の変化に驚いて心配になってきました。この変化がどのようにして起こったかを知った彼らは、本人の友人たちに逆の実験を行なうように依頼しました。そこで友人たちは本人を見舞って「元気そうになったね」と語ることにしたのです。これが三月続いてから本人はもとの健康体に立ち返ったのでした。しかし病気にかからせる期間のほうがはるかに短くてすんだということです。

この実例において実際に起こったのは、本人が暗示によって肉体の力（複数）を分割してしまったということです。肉体の半分は病気だという暗示に従ったのですが、他の半分は肉体を健康に保とうとしたのです。そこで肉体内に闘争が生じたのですが、病気だと暗示された際の疑惑によって生じた〝悪化の過程〟のほうが勝ったわけです。

ある国が他国を疑ったために発生した戦争がこれまでにありました。個人の内部に闘争が起こりますと同じ種類の戦争が行なわれます。その結果、人間は肉体的にも精神的にも病人になります。これは肉体の健康にあてはまるばかりでなく、人間の努力のあらゆる分野にもあてはまります。

親和の法則は確実性に基づいています。結合すべきものを分割すれば必ず悪い結果をもたらします。肉体のあらゆる部分は善、悪または無関心のいかなる暗示にも従うのです。

人間は暗示によってただちに暗い気分になることが知られています。しかも他人からの暗示がなくても、しばしば自身にたいして自己暗示をかけています。これについては多くの書物が書けるでしょう。なぜなら人間はみな自分や他人に暗示をかけているからです。それゆえわれわれは、分割されてはならない物事を分割しないようにするために、自分がいかなるタイプの想念を放って

いるかについて注意しなくてはなりません。

真理には二種類あります。すなわち宇宙的な真理と個人的な真理です。大抵の人はエゴを喜ばせる自分だけの個人的真理によって生きています。だからこそ種々の真理が存在するわけです。

宇宙的な真理のもとに生きている人はごく少数です。宇宙的真理は個人的真理に反するからです。現代においては特にそうです。宇宙の真理はただ一つしかありませんが、個人的真理は多くの区分を持っていて、それが利己的な人を闘争の状態に保っています。この闘争が肉体を健康にするかわりに逆に引き裂いているのです。

個人的真理を捨てて宇宙的真理のもとへ帰るのは容易なことではありません。人間は長い期間につちかわれた個人的な習慣を持っているからです。しかしわれわれが持って生まれた〝宇宙的な目的〟を遂行するためには右のことがなされねばなりません。個人的なものはいっさい〝宇宙の住み家〟に入ることはできません。しかし個人は宇宙と融合することによって一体となることはできます。これは自我の救出といってよいでしょう。

私の哲学に関して質問をよこした人がありました。私の哲学は現代から飛躍しすぎているではないかというのです。しかし、われわれが未来において進歩した知識から恩恵を受けようとすれば、準備のできている人はいまこそ私の哲学を研究し、その知識にたいする欲求が一般化するときにはすでにそれを身につけている必要があります。

この準備のできた少数の人々がいつも存在しているということは有難いことです。彼らは未来の世代のために基礎となっているからです。宇宙的真理のなかには時代から飛躍したものは何もありません。

〝新しさ〟によってのみ生命は現われます。〝新しさ〟は宇宙の原理であるからです。宇宙は年月や習慣によって支配されません。

（十八ページより）キーを知っているならば、あなたはそれを信じてよいでしょう。多くの利益が聖書から引き出せますが、ただしそれは聖書を読む人がそのなかに描写されている状況全体を理解するのに充分な素地を持っているならばです。いずれ時機が来たとき、私は聖書の予言類を正しく理解するためのキーを読者に提供しましょう。予言によってこれまですでに文字通りに実現している物事や、今後も実現するであろう出来事にあなたは全く驚嘆するでしょう。いうまでもなく最大のキーの一つは、他の惑星から地球へ来る人々の知識と彼らの目的です。

予言者ダニエルが未来に（すなわち二十世紀に）発生する出来事に関して宇宙人から与えられた知識を記録したとき、ダニエルはその意味が悟れなかったので次のようにいっています。「わが主よ、これらの事の結末はどうなるのでしょうか」宇宙人は答えた。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。この言葉は終わりの時まで秘し、かつ封じておかれることになっています。（ダニエル書第十二章八―九節）」それが秘密に保たれてきたのは、正しく解釈するためのキーがやがて失われてしまったからです。しかしいまやそのキーは取り返されて覚醒の時機がせまっています。いつか私はそのキーを詳細に説明した記事を、望む人にだけ手もとへお送りするということを約束しておきます。新しい概念のすべてをよく評価して下さい。

時代と反逆者

C・A・ハニー

一九五八年にソ連の天文学者ニコライ・A・コズイレフは月面に一つの爆発現象を発見し、ガスの流れを撮影したと報告しました。（注。一九五八年十一月三日、クリミヤ天文台のコズイレフは百二十五センチ反射望遠鏡を使用して、アルフォンスス火口の中央峰をつつむ赤色のガスをスペクトル撮影した）いうまでもなく米国のほとんどの天文学者はこの報告を嘲笑しました。

続いて一九六一年にもコズイレフは、スペクトル分析によってアリスタルコス火口付近に水素ガスを発見したと報告しました。（注。一九六一年十一月二十六日と二十八日、及び十二月三日に水素ガスの噴出を発見した）またもや彼は他国の天文学者から冷笑の的になりましたが、いまになってみれば結局彼は正しかったようです。一九六三年十月三十日に、米国アリゾナ州フラッグスタッフのローウェル天文台の二十四インチ望遠鏡は、アリスタルコス火口付近に発生したルビーのような赤色光をとらえましたし、十一月二十七日にもヘロドトゥス谷（注。〝コブラの頭〟ともいわれている）で赤色光を発見しました。そして四人の米天文学者がこの報告を支持しています。

右の十月における発見の際は月面上の三ヵ所の異なる地域で光点が出現しました。地球から観測されるほどの巨大なこの光点を何が起こしたかについては、今日まで原因がわかっていません。学説によればガスの噴出だとか火山活動だとかいろいろいわれていますが、後者がもっともらしく聞こえます。

さて、ケァリフォーニアの〝シティズン・ニューズ〟紙一九六三年十二月三十一日付に左記のような記事が掲載されました。これは興味ある記事なので再録しますが、内容に関して保証はできません。津波と地震に関する予言は特に興味があります。明確な日付が述べてあるからです。

「大津波の発生を予言」（注。シティズン・ニューズ紙の読者欄より）この日曜日に私はケァリフォーニア州の地図をひろげて、一九六四年五月九日に発生すると予言されている大災害の範囲を調べてみた。

右の日に大津波が発生してケァリフォーニア州沿岸を襲い、内陸を洗い流すということになっている。その破壊力は恐るべきものであろう。被害をこうむる地域は同州の上方左端のアール湖からコプコ湖まで、フォートブラッグからエンジェルマインまで、サン・ラファエルからプレイサーヴィルまで、ボウルダー・クリークからロックフォード・ヴァリー・スプリングズまで、サンタクルスからオークレイドまで、モンテレイからメルセッドまで、タサジャラ温泉からフレスノまで、サンマーティン岬からヴィサリャまで、サンルイス・オビスポからトゥイン・オークスまで、ロンポクからソールトデイルまで、ロサンジェルスからクルセロまで、サンホアン・カピストラノからガーネットまで、サンディエゴからサルトンまでとなっている。

右以外にケァ州の大部分は海洋下に沈むだろう。大津波には地震が伴うからである。その地域を記すと次のとおりである。サンタクルス、サンホセ、オークデイル、モンテレイ、タサジャラ温泉、フレスノ、サンルイス・オビスポ、ホボ温泉、トゥイン・オークス。

エドガー・ケイシーの予言類と関連した第二次のケァ州大災害は、一九六七年の四月なかばに発生するといわれている。そのとき右の五月九日における第一次の浸水地域は全部沈下するはずである。かかる予言はどこまで真実性を持つだろうか？　エドガー・ケイシーは二十年以上も前にこれらを予言した。〝神の警告の合図〟をわれわれに与えたのは彼である。彼の予言類のなかに次の言葉がある。『ピーリー山が爆発したならば、それから九十日経過してケァリフォーニァ州は大津波に襲われるだろう』西インド諸島のマルティニーク島にあるピーリー山爆発に関して私に与えられた日付は一九六四年二月五日であった。

ロサンジェルス　　マイクル・ジェファード」

（注。ピーリー山は予言された日に爆発しなかったようです。編者）

オズワルド事件に関して―。人々は常に自分の過失をタナに上げて他人を非難したがります。存在する証拠を直視せず、自分の側の憎悪が故大統領暗殺事件の背後にあったことに気づきもしないで人々はあの犯罪にたいして極左を非難しています。進歩と自由にたいして共産主義が大きな脅威であることは、だれよりもまずこの私が認めますが、一方私は、一般人が事実を直視して世界の難問題をなくすために自分の生活で具体的な物事を行ない始めたのだとも考えます。一読者から私宛に来た手紙を掲げましょう。

「あの忘れられない昨年の十一月二十二日以来発生している多くの出来事を考えてみますと、人間というものは偉大な指導者をいかに神格化したがるかという実例を見て、興味深く思い参考にもなりました。

多数の街路、橋、学校、宇宙センターなどがすべてケネディーの名をつけたり改称したりしています。明らかにこれは最大の悪徳によって倒れた指導者にたいする大いなる尊敬と愛着とをあらわしていますが、こうした感情の表現を考えてみますと、われわれは、人間というものは大体において〝礼拝の対象物〟を持つ必要があるのだということを痛感させられます。この〝半熱狂的感情〟を未来がどう処理するかは興味ある問題です。

また故ケネディー大統領が存命中に有能な指導者として多数の人から高く尊敬されていた当時はわれわれと同様にただの人間にすぎなかった事実を考えれば、イエスがその死後に弟子や信者たちからいかに神格化されたかを理解できるのではありませんか。イエスの行為が現代でも奇跡とされるならば、二千年前は奇跡と神秘以外の何物でもなかったと思われます。少なくともイエスが神の子としてかっさいを浴びたことは不思議ではありません。

イエスが太陽系の高度に進化した惑星（金星）からの使者であったという宇宙人の説を信ずれば、いわゆる彼の奇跡は、われわれが何も知っていない高度な自然の法則に関する知識を通じて実際に可能であったということになります。病気の治癒、死者の蘇生、食物の出現、その他の奇跡的な現象によって示されたこの法則の駆使の例は、明らかにこの地球上に高度に進化した一人の人

間がいたことを示しています。しかるにイエス自身は次のようにいっています。『私を信ずる者、私の行為を信ずる者は、みずからもそれを行なうことができる。私よりももっと偉大な物事を行なうことができるだろう』この言葉によってわれわれは、だれでも現代の思想の苦境から自己を救い出して、他の惑星の進化した兄弟によって楽しまれている生き方に返るべき能力を持っているのだと考えられます。どうもわれわれはイエスの次の言葉を忘れているようです。『あなたがたが神なのだ』

アーカンソー州プラマヴィル　　L・F」

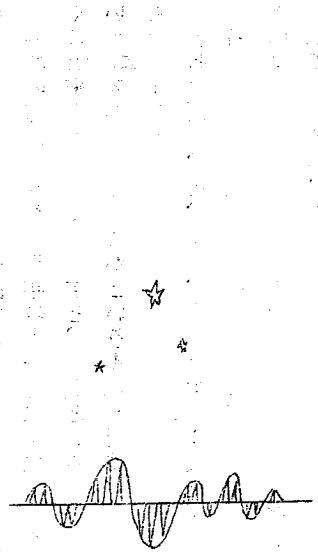
読者のなかには私が機関誌を発行する目的や私の企図している仕事について理解しない人があります。私は人々を楽しませたり気持ちを玄惑させたり、自我を喜ばせたりすることに興味はありません。私は人々の思考力に刺激を与えたり知識欲を旺盛ならしめようとしたりしているわけです。これを達成するための記事を書くのであって、議論のための議論をするために書くのではありません。

かつて、十字架にかかった十六人の救世主に関する書評や記事を書いたために一婦人が抗議してきました。彼女のいい分によれば、だれをも非難しないような記事を書くべきで、既成宗教を批判するような記事は差し控えよというのです。たしかに私はそんな記事を書きたくはありません。私の目的は真実にたいして人々を目覚めさせることであって、次第に既成宗教にたいする信仰が薄れてくれば、そのほうがむしろためになるのです。

この世界の大半の進歩は、急進的で自由主義的な人、周囲からあらゆる手をつくして抵抗されながらも自己の計画を押し進めた人たちによってもたらされています。年月がたてばこうした人々は英雄とみなされ、その行為が尊敬されますが、本人が活動しているあいだは多くの人によって反逆者とみなされます。

この好例はアブラハム・リンカンです。今日彼は〝ザ・グレイト・イマンシペイター（偉大な解放の父）〟と称されて、あらゆる政党やほとんどすべての国から尊敬されていますが、彼の存命中はかなり異なったふうにみなされていました。

今日多くの人は故ケネディー大統領と彼が議会を通じて強行しようとした諸計画を批判しています。これと同じことはジョンソン大統領にたいしてもなされています。進歩というものは、世界の指導者たちの決意に含まれている諸要素をほとんど理解していない非難者を無視して行なわれるのです。



質疑応答

C・A・八二

問 1 火星に住む人々は地球人よりも精神的に発達しているのですか。（カナダ、E・S）

答 火星人は地球人よりも発達していますが、精神的な面では金星よりも遅れています。火星は金星に比較して科学技術の進んだ惑星で、多数の宇宙船を建造して他の惑星へも供給しています。

問 2 地球は太陽系内の他の惑星すべてに比較して精神的に最も劣った惑星ですか。それとも地球以下の惑星がありますか。

答 太陽系内でこれまでに知られている惑星群だけについていえば、そのなかでは最低です。しかしこの太陽系以外の他の太陽系では地球より程度の低いのがあります。

問 3 右の二つの質問は聖書とコンフリクトする（相容れない）のではありませんか。

答 そんなことはありません。ただし聖書に関して正しい理解を持てばです。

地球が最低であるのは、むかし地球は他の惑星の厄介者が追放された場所であるからです。これが現在の各種族の起源です。これは聖書中に、天空の〝御使いたち〟を地上に墜落せしめて処罰のために閉じ込めたと述べてある部分と一致します。（ペテロの第二の手紙第二章四節、ユダの手紙六節、イザヤ書第十四章十二節―十五節）

問 4 このようなことは尋ねたくないのですが、ある団体によると、たとえばケネディーのごとき偉大な指導者の死後は、本人の死体がひそかに宇宙船に運ばれて、それを生き返らせ、再び地球に送り返すのだといっています。これについては？（アーカンソー州プラマヴィル、L・F）

答 そんなことをしなければならないという理由はありません。肉体はさほど重要ではありません。もし〝肉体の奥にある英知〟がこの地上で働き続ける必要があるとすれば、全く別な肉体を通じて働くでしょう。ケネディー氏の場合は、宇宙開発計画における彼の仕事はジョンソン大統領によってひき継がれています。それでケネディー氏の背後にある〝指導力〟がジョンソン大統領を導くでしょう。いいかえれば、もし宇宙人がケネディー氏に影響を及ぼしていたとすれば、こんどはその影響力をジョンソン大統領に向き変えるでしょう。〝生き返り〟ということが行なわれればそれはすばらしいことですが、ケネディー氏を生き返らせてそれを地上にもどさねばならぬという理由はありません。

問 5 あらゆる宇宙人がすべて友好的であるとはかぎらないとあなたは以前に述べたことがあります。敵対的な宇宙人がいるとすれば、それはどこから来たのですか。

答 それはこの太陽系以外の別な場所から来るものと思われます。

現実に敵対行為であったといわれる事件のほとんどは、地球人か、または処罰のために地球へ追放されて他人に強烈な恨みを抱いている人によって起こされます。彼らは多数の人を支配するために心霊的な方法を応用していますし、なかには迷信によって悪魔のせいだとされている現象を起こしたりするのもいます。

女予言者の見た一九六四年

ルース・モントゴメリー
ハースト・ヘッドライン
サービス、ワシントン員

一九六四年一月十二日記

民主党の勝ち

「民主党は来たる大統領選挙戦で辛勝するでしょう」ワシントン在住の世界的に有名な女予言者ジーン・ディクソンはこのように予言した。「水晶球の示すところによりますと、民主党側に紙一重の差で凱歌があがります。これは逆転勝ちです。なぜなら最後の得票数が計算されるまでは共和党が優勢だから」

一九六〇年に選出される青い目の大統領が暗殺されることを一九五六年に的確に予言したディクソン夫人は、更に事件発生の五日前にその悲劇を見事にいいあてた人である。

ジョンソン大統領について彼女は次のように語る。「ジョンソン氏が今秋の大統領選に立候補するかどうかはわかりません。氏はまだ状況観測の段階にありますが、さいわいなことに国内の状態にたいしてはしっかりした指導力を持っています」

最大の問題は中共

彼女の水晶球は、米国にとって目下最も切迫した問題は人種問題と中共だと告げている。「中共のアフリカへの浸透と米国共産分子にたいする呼応策及び中共のキューバ基地使用などは、米国内で人種問題上の暴動を起こします」

彼女は、一九六四年から六七年にかけて、米国にとって国内及び海外問題で大きな危機が起こるものとみている。

ソ連に新しい指導者

この危機は、これから十八ヵ月以内にソ連でフルシチョフにかわって一人の新しい指導者が出現することによって拡大するという。

「この指導者の名前はSという字で始まります。この男は学者タイプの知的な人で、背はさほど高くはありませんが、米国にとってはフルシチョフよりも扱いにくい人です。本人はすでにソ連、中共、東独の科学者と共同で働いていて、彼らは米国のレーダーを作動不能にし、通信施設をマヒさせる巨大な武器を用いて米国の破壊をたくらんでいます。しかし成功しません」

一九六四年には、諸外国にたいして米国はさほど干渉しないと彼女はいう。

「英国では保守党が辛勝するでしょう。英国はソ連との貿易を拡大し、ドイツと（注。東と西のいずれか不明）ソ連はより大きな経済交流を図るでしょう。ベルリンの壁は取り除かれますが、

今年末までは実現しないでしょう。

フランスのドゴール大統領は一九六四年中に権力を失うでしょう。ソ連は政治的には東よりもむしろ西側に手を出し続け、インドは新たな経済危機に直面します。エジプトのナセル大統領や彼の盟友から〝多くの知恵〟が出されます」

ざっと以上がジーン・ディクソンの海外問題に関する予言である。選挙戦を迎えた米国の今年における国内情勢については次のように述べた。

「ジョンソン大統領は目下参謀格としてミネソタ州のユージン・マッカーシーを引き入れようとしていますが、マッカーシーが最終的に選ばれるかどうかはわかりません。

平和部隊のサージェント・シュリヴァーの運勢が急速に上昇しています。いつか大統領になるかもしれません。彼はすばらしい大統領的素質を持っていますが、今後数年は彼の命をねらう陰謀を警戒する必要があります。

ヒューバート・ハンフリー議員、ケアリフォーニア州知事パット・ブラウン、ニューヨーク市長ロバート・ワグナーたちも六四年のニューズでかつてないほどに輝かしく頭角を現わします。

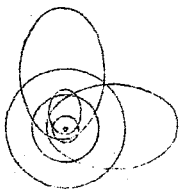
共和党側としては、黒幕の勢力がリチャード・M・ニクソンを持ち上げていますし、バリー・ゴールドウォーターは自分の立候補の宣言を長いあいだ胸中に秘めていました。彼は提供されつつあった支持運動にすぐ手を出すべきでした。この基盤のロスは克服できるでしょうが、いまどうしているかはわかりません」

新しき救世主、出現す！

「テディー・ケネディー議員の政治生命は長く続くでしょう。これは彼自身の実力によります。しかしロバート・ケネディー司法長官は他の二人の兄弟ほど政治的な功績をたてません。

新しく任命されたトーマス・C・マン副国務長官は米国にとって〝きわめて有利な存在〟です」

ところで残念なのは、ジーンの予言で最も意義深いものがあるけれども、二、三十年先でないと結果がわからないということである。彼女の水晶球が告げるところによると、昨年二月にエジプトで幼児が生まれたが、これはイエス出現以後の最大の救世主として世界に君臨する運命をになっているという。いずれにしてもこの苦難の時代にジーンはわれわれに希望の光を投げかけたとはいえるだろう。



新しい概念を評価せよ

C・A・ハニー

私が機関誌に掲載した各種の記事について寄せられる非難のほとんどは、宗教上の調査論文に向けられています。

非難を寄せる人たちのすべてが、彼らが正しくて私が間違っていることを〝知っている〟としても不思議ではありません。しかしあらゆる場合に彼らは私の考証を完全に無視していますし、私の意見を裏書きするために提供する史実のいずれをも見すごしています。

だれでも自分が望ましいものを信ずるのは自由ですが、同様に私が自分の信念を持つ自由は等しくあるのであって、意見を印刷して発表する権利もあり、何かの特殊な問題に関する意見を述べる権利もあります。

円盤問題に関する私の意見を無視して、自己の信念のために〝戦う〟真剣な人を私は尊敬します。あらゆる場合において可能なかぎり私は自分のとは異なる信念を読んでみて、私の意見や信念の変更を保証するに足るほどの証拠が存在するかどうかを調べるようにしています。もしそうした証拠が存在するならば、私は自分の意見をただちに改めるでしょう。

ある人たちは、私がすべての宗教的信仰を破壊し、特殊な教会に攻撃を加えているのだと感じているようです。しかしほとんどすべての場合に、彼らが正しい信念と生き方にたいするガイドとして聖書だけに従えばよいと主張しているかぎり、この人たちがほんとうに真剣なのではないことを私は知っています。彼らは（注。主として聖職者を意味する）自分たちの教会が教えている物事にあてはまるわずかな部分だけを聖書から捨い出しますが、自分たちの教えに一致しない部分は無視しています。私にいわせれば、彼らが聖書を唯一のガイドとして認めよとまじめに主張するのならば、「聖書に述べてあるすべての事柄を受け入れるか、さもなければすべてを無視せよ」です。

私の宗教論文に関して非難する人のほとんどは、聖書を〝神の言葉〟として受け入れているのだともいっています。そこで異なる見地からこの稿を進めてゆくことにしましょう。私は聖書を私の拠り所として用いながら記事を書くことにします。聖書に従えと主張する人は私の記事を注意深く調べて、それが自身の意見と一致しないかどうかを見て下さい。もし一致すればその人たちは考えを改めるほうがよいでしょう。

教会が主張し得る唯一のガイドは聖書であり、またそのなかに描かれた、イエスの弟子たちによって述べられた諸例です。黙示録はだめです。それを信じている者以外の人にとって、それは単なる噂話にすぎません。聖伝は役に立ちません。そのほとんどは想像で色づけされていて、それを支持できる証拠はないからです。

かつて私は、宇宙人の進歩した教えは必ずしも万人に伝えようと意図されたものではないと述べました。この教えを望む人は自身でそれを得るための努力をする必要があります。もし人が関心を示さねば、それはそれでよいこととして、関心のある人だけに奉仕することに全力をそそぎます。いいかえれば、私は改革運動をやろうとするのでもなければ、他人の意志をひるがえさせて私の方に引きつけようとするのでもありません。しかるに数日ごとに或る教会のグループや個人が私の家にやって来て、彼らの信仰を押しつけようとします。私が彼らの教えに関心があれば押しつけられることに反対はしませんが、私が「ノウ」といえばそれは彼らが問題をひっこめて自己の信ずる道を勝手気ままにやってもらいたいことを意味します。ところが実際には彼らは家のなかから出ようとしないで、議論し、容易にあきらめようとはしません。彼らの信念は、イエスやその弟子たちが示した例にならっているということなのであって、戸別訪問をやって歩くときは特にそうです。この問題に関する事実はどうでしょう？

聖書中で、戸別訪問の信念が正しいことを支持するのに用いられる部分は使徒行伝第二十章二十節です。この部分は文脈からみればその信念を支持しているように見えますが、これに先行する個所を読んでみますと、パウロは一般人にでなく教会の長老たちに話していることがわかります。いいかえれば彼は長老たちを一個所に呼び寄せて教えたのであって、信じない人にまで信じさせようとして戸別訪問をやったのではないのです。

別な個所もこれと同じ問題を述べていますが、この場合もだれもが信者なのであってみな〝一緒に〟なっていたのです。それで弟子たちは各信者の家へ行って宿泊や食事の応待を受けたのであることがわかります。彼らは決して信じない人の家へ行って、いやがるのを説得しようとはしませんでした。同じことがルカによる福音書第十章一節から十二節にかけて述べてあります。特に七節は明快です。「家から家へと渡り歩くな」これに前後する数章は右の例と同じく正しい文脈を作っています。すなわち、人々が迎えてくれるならば（信者の家ならば）出される食物を食べよ、人々が迎えてくれないならば、足のチリを払って別な町へ行けとなっています。これが聖書中の基準からみて正しい行為であることは、マタイによる福音書第七章六節に明確に述べてあります。（注。「聖なるものを犬にやるな。また真珠をブタに投げてやるな。おそらく彼らはそれを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう」）

宇宙人の教えを伝えるのにもこれと同じことがいえます。それで私はその教えを望む人にだけ提供しているのであって、関心のない人に押しつけて迷惑がられることはしません。今日望ましいことは、かかる知識（宇宙人問題）は「押しつけるのでなく、望む人には入手できる」ということを万人に知らせることにあるといえるでしょう。一流新聞に広告を出せばそれは可能でしょうが、それには金がかかります。一ページ分の広告でも数千ドルを要します。これに次ぐ方法としては口頭による宣伝です。これは日数がかかりますが、実際的であって数年間私はこれを実行してきました。ときどき定期的な宣伝はやりますけれども、通常は読者の口頭宣伝に頼っています。

さて聖書に返りましょう。もしだれかが「自分は聖書をガイド

として用い、日曜日には礼拝している」といおうものなら、私は相手の信仰についてそれ以上論議する義務から解放されたように感じます。なぜか？　それは、聖書がその問題に関する典拠であるとするならば、日曜日の礼拝は神にとっては忌むべきことであって、聖書中では禁じられているからです。これは読者にはショッキングな説かもしれませんが、聖書から完べきに証明できますから、読者は自分の目でそれを確証できるでしょう。

あなたが聖書を信ずるならば、テサロニケ人への第一の手紙第五章二十一節に述べられた言葉に従わざるを得なくなるでしょう。そして「すべてのものを識別して、よいものを守る」ようになるでしょう。あなたの信念が試錬に耐えないならば、その信念は変えられるべきです。またあなたが聖書を〝神の言葉〟と信ずるならば、テモテへの第二の手紙第三章十六節を必ず受け入れるはずです。この節において、あなたの信念が聖書に照らして誤っているならば、あなたは非難を受けねばならないし、自分の信念を訂正しなければならないということに気づくでしょう。聖書はわれわれに「安息日を記憶してそれを聖なる日にせよ」といっています。それはキリスト教の初期の創始者たちが命令として伝えた律法の一部です。安息日を守らないことは当時罪であったのであって、ほとんどすべての教会が認めているように、それは過去においても現在でも土曜日を意味しています。日曜日は新約聖書では〝週の最初の日〟とされており、今日では土曜日すなわち安息日に比較して〝主の日〟と呼ばれています。

日曜日という名称は聖書中に全然言及されていません。全新約聖書中に日曜日は正確に八回ほど〝週の最初の日〟という表現で記されています。曜日の連続性はあらゆるカレンダーの変遷を通じて守られてきましたから、それで今日の土曜日は二千年前に土曜日であった日と同じ日になっているわけです。

イエスは週の七日目（土曜日）を大切にし、日曜日を守りませんでした（ルカによる福音書第四章十六節）。週の七日目を安息日として守るのが彼の習慣だったのです。イエスが十字架につけられてから三日後も、この安息日は週の最初の日すなわち日曜日の前日でした（注。マタイによる福音書第二十八章一節。「さて安息日が終わって、週の始めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが墓を見に来た」）。

ここで疑問が起こります。イエスまたは他の使徒たちのいずれも安息日を日曜に変更する権限を持っていたか？　新約の教会は礼拝日としてずっと日曜日を守ってきたか？　といった問題です。そこで日曜日に関する聖書中の八個所の記述を調べてみましょう。

(1)　マタイによる福音書第二十八章一節。これはすでに右に述べました。安息日がなおも週の最初の日（日曜日）の前日であったことを示しています。

(2)　マルコによる福音書第十六章一―二節。ここでは安息日が過ぎたあと、週の始めの日（日曜日）の早朝、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが墓へ行ったとあり、ここでも安息日は依然として土曜日でした。

(3)　マルコによる福音書第十六章九節。ここでも週の始めの日に起こった（一節で述べてある安息日の後）事件について語っています。

(4)　ルカによる福音書第二十四章一節。この第二十三章の最後の

節には、女たちは帰って墓の中のイエスのために香料と香油とを用意し、「それからおきてに従って安息日を休んだ」のですが、次の章の一節になると、日曜日（普通の労働日）に彼女らはかねてから用意しておいた香料を携えて墓に行ったことがわかります。ここでも土曜日が休息の日であったことは明白です。

(5) ヨハネによる福音書第二十章一節。この個所はイエスの死から約六十年後に書かれたものです。したがって右にあげた各記述がなお真実であることを確証しています。

(6) ヨハネによる福音書第二十章十九節。この個所では弟子たちがユダヤ人を恐れて、日曜日にひそかに集合しています。教会によってはこの部分を、弟子たちはイエスの生き返りを祝うための〝日曜日の儀式〟を行なうために集まったのだと解釈しているのがありますが、これはこじつけです。なぜなら「ユダヤ人を恐れて」とはっきり述べてあるからです。弟子たちは隠れていたのです。彼らはイエスが死からよみ返ったことを信じなかったのですから、それを祝うために集まるはずはありません。このことはマルコによる福音書第十六章の、イエスが生き返ったことを弟子たちは知らされたけれども、信じなかったという説明でわかります。これはまたルカによる福音書第二十四章三十七―四十一節に記してあります。

(7) 使徒行伝第二十章七―八節。「週の始めの日にわたしたちがパンをさくために（食事をするために）集まったとき、パウロは翌日出発することにしていたので、しきりに人々と語り合い、夜中まで語り続けた。わたしたちが集まっていた屋上の間には、あかりがたくさんともしてあった」これは週の始めの日の会合で、ユテコという青年が眠くなって窓から落ちるという事件が発生したが、日曜日の集会ではなかったのです。彼らの週の最初の日は日没に始まったのですが、これは現在の土曜日の夕方と一致します。したがってパウロは夜中まで語り続けたけれども、現代の時刻でいえば実際には安息日が終わるまで話していたわけです。日曜日の朝になってからパウロと他の者たちは普通の労働日を迎えたわけです。

さて新約聖書中に述べてある日曜日に関する最後の記述例として八個所目を見ることにしましょう。

(8) それはコリント人への第一の手紙第十六章二節です。「週の始めの日ごとに、あなたがたはそれぞれ、いくらでも収入に応じて手もとに貯えておき―」とあります。この節の正しい文脈をつかむためには、その前後の節とともに読む必要があります。パウロはエルサレムの貧しい人たちのために食物や果物を集めるようにコリント人へ依頼しています。このことは彼がガラテヤの教会に同様の命令を与えたといっていることからわかります。ローマ人への手紙第十五章二十五―二十八節にも、彼はマケドニヤとアカヤの教会に同じ指令を出しています。これは説教師に与えるための献金を依頼したのではなく、エルサレムにいた、貧しい、食物のない、よるべなき人たちの福祉のために寄付してくれと頼んでいるのです。この通達は日曜日に行なわれたのであって、その日に金品を集めましたが、それは宗教的な意味を帯びたものではありませんでした。とにかくこの場合は日曜日が普通の労働日であるとなっています。

そこで日曜日のおきてを定めた典拠がなかったとすれば、いっ

たいどこから日曜日即休日の習慣が起こってきたのでしょう？

一九六二年から六三年にかけて連載した私の記事〝現代の宗教の起源〟を読まれた方はすでにおわかりのことと思います。日曜日は初期のキリスト教徒すべてによって、異教徒とみなされていた人々と自分たちの宗教（キリスト教）を区別するために、労働日として厳重に守られてきました。しかるに異教徒たちは日曜日を太陽神の礼拝日としていたのです。

〝神の日〟と呼ばれた日曜日はイエスが出現するよりもはるか以前に存在していたのです。ウェブスターの〝休日〟によりますと、初期のキリスト教徒は三世紀の終わりごろまでは日曜日を休日としなかったとあります。ところがその後、キリスト教に浸透していた異教徒の改宗者によって日曜日が教会へ導入されたのです。

コンスタンティン大帝の右名な布告（三二一年）は、日曜日をローマ帝国の宗教の休日の一つとして編入しています。こうして異教徒の慣例はキリスト教に混入されてしまったわけです。コンスタンティン大帝はローマ帝国の民間出の為政者であって、聖職出ではありません。彼は四十才までは異教徒の太陽神宗教を信仰していました。太陽こそはコンスタンティンの偉大な不可視の保護者で指導者であるとして礼拝されたのです。日曜日すなわち太陽神バールの日に礼拝することを拒否したばかりに、ライオンのもとへ送られたキリスト教徒がいかに多かったかという事実を知っている人は少ないでしょう。

日曜日に神を礼拝するのは神にたいして忌むべきことであると述べた個所は聖書のどこにあるでしょう？　多数のキリスト教徒はいうでしょう。「復活祭、クリスマス、四旬節、日曜の礼拝などがみな異教徒の習慣から起こったとしても、それがどうしたというんだ。自分は異教徒の神々を祝うためにこんな祭日に従うのではない。イエスとその教会を礼拝するために祝っているのだ」

申命記（旧約）の第十二章三十—三十一節に次のように記してあります。「『これらの国々の民はどのようにその神々に仕えたのか、私もそのようにしよう』といってはならない。あなたの神、主にたいしては、そのようにしてはならない。彼らは主の憎まれるもろもろの忌むべきことを、その神々にむかって行ない、息子、娘をさえ火に焼いて神々にささげたからである」この言葉はあなたが異教徒の習慣に従って礼拝してはならないということをはっきりと述べています。

聖書というものが、その教えに従うべきだと主張する人々から実際にはいかに無視されているかという事実について別な例をあげましょう。この次あなたがラジオまたはテレビで説教師の祈りの言葉を聞くとき、または町角でそれを聞くときには、マタイによる福音書第六章五—六節を読んでから自分の結論を引き出されることをおすすめします。（注。「また祈るときには偽善者のようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りの辻に立って祈ることを好む。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたは祈るとき、自分の部屋に入り、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は報いて下さるだろう」）

聖書中の約三分の一は予言です。文字通りに実現する予言なのです。あなたがそれを理解するための正しい（七ページ下段へ）

生活への助言

J・クリシュナムルティー

同化

あなたはなぜ自分を他人、グループ、国家と同化させるのか。なぜあなたは自分をキリスト教徒、ヒンドゥー教徒、仏教徒と称するのか。またなぜあなたは無数に存在する宗派の一つに属するのか。宗教的にも政治的にも、人間は伝統または習慣、衝動、偏見、模倣や怠惰などによって自分を各種のグループに同化させている。この同化はあらゆる創造的理解力を停止させ、そのためにグループのボス、聖職者、お気に入りの教祖などにあやつられる単なる道具となり果てるのである。

いつだったか或る人が「だれそれは或るグループに属していますが、私はクリシュナムルティー派です」といっていた。本人はそう語りながらもこの同化の意味に全然気づいていなかった。彼はどう見てもバカではなかった。知識もあり教養も身につけていた。彼自身の言葉は感傷的、感情的でもなく、それどころか明快で、動揺はなかった。

なぜ彼はクリシュナムルティー派になったのだろう。かつて彼は私以外の人を信奉したことがあったし、多くの退屈なグループや団体に入ったこともあった。そしてついにこの私という特異な人間に自分を同化させてしまったのである。彼の言葉から察すると遍歴の旅は終わったようであった。彼は態度をきめた。そして事は終了したのであった。彼は自ら選んだのであって、何物も彼を振り離すことはできなかった。彼はこんどはゆったりと落ちついて、私がこれまでに発表した言説のすべてを熱心に追求しようとしていた。

われわれが他人と同化する場合、それは愛の同化なのだろうか。同化は試みを意味するだろうか。同化は愛と試みとを停止させないだろうか。実際には同化とは所有することなのであって、所有権の主張なのである。だとすれば所有することは愛を否定することになるではないか。所有することは確保することである。すなわち所有は防衛であって自己を不死身にしようとする。同化の際には多少とも抵抗が伴う。すると愛は自己防衛的抵抗の一つのかたちだろうか。防衛が存在するところに愛が存在するだろうか。

愛は不死身で、しなやかで、受容的である。愛は感受性の最高のかたちであるが、同化は無感覚を助長する。愛と同化は相容れない。後者が前者を破壊するからである。同化とは根本的には心が自らを保護し拡張するための思考過程なのである。自己を形成するのに心は抵抗し防衛しなければならないし、所有したり捨てたりしなければならない。この過程において、心または自我はますます強力になり有能になってくる。同化は自由を破壊する。しかるに自由のなかにのみ最高の感受性があるのである。

何かを試みるのに同化の必要があるだろうか。同化の行為その

ものは探求と発見を停止させないだろうか。自己発見という試みがないかぎり真理がもたらす幸福はあり得ない。同化は発見を停止させる。それは怠惰の別なかたちである。同化は身代りの体験であって、それゆえに完全に間違ったことなのである。

体験をするためにはあらゆる同化行為をやめなければならない。試みるためには恐怖があってはならない。恐怖は体験を妨げる。他人、グループ、イデオロギーなどとの同化を助長するのは恐怖である。恐怖は何かに抵抗し、それを抑圧しなければならない。それでかかる自己防衛の状態において、どのようにして地図にもない海に乗り出すことができるだろう。真理または幸福は自己を探求する旅を企てないかぎりやって来ない。あなたがイカリでつながれているならば遠くへ出かけることはできない。同化は逃避である。逃避は保護を必要とするけれども、保護されるものはまもなく破壊される。同化はそれ自体に破壊をもたらし、そのゆえにさまざまの同化行為のあいだにたえまのない闘争が生じるのである。

同化を求めて、または同化に反してわれわれが苦闘すればするほど、理解にたいする抵抗はますます大きくなる。人が自己の内外両方の同化行為の全部に気づくならば、また同化の外的な現われは内部の要求によって投影されたことを知るならば、発見と幸福の可能性がある。自分を何かに同化させている人は決して自由を知ることはできない。自由のなかにだけあらゆる真理が生じるのである。

思考と愛

感情的、知覚的内容を持つ思考というものは愛ではない。思考は常に愛を拒絶する。思考は記憶に基づいているが、愛は記憶ではない。あなたが愛する人のことを思うとき、その思いは愛ではない。あなたは友人の習慣、態度、特異性を思い出し、その人とのあいだにあった楽しい、または不快な出来事を考えるかもしれないが、思考が呼び起こす情景は愛ではない。本来思考は分離性を持っている。時間と空間、離別や悲痛などの感覚は思考の過程から生まれる。そして愛があり得るのは思考過程が停止するときだけである。

思考は所有欲、すなわち意識的または無意識的にしっと心を培養するあの所有欲を生み出す。しっとのあるところには当然愛はない。しかるに大抵の人にはしっとが愛の徴候とみなされている。しっとは思考の結果であり、思考の感情的内容の反応である。所有したい、または所有されたいという感情がふさがれるとき、空所ができて、羨望が愛にとってかわる。それは思考が愛の役割を果たし、それによってあらゆる混乱と悲しみが起こるからである。

あなたが或る人について考えないとすれば、わたしはその人を愛していないからだとあなたはいうかもしれない。しかし他人について思いを起こすことが愛といえるだろうか。あなたが愛していると思っている人について思いが起こらなかったとすれば、あなたはむしろ恐ろしくなるだろう。あなたが死んでいる友人について考えなかったとすれば、そのような態度を冷酷無情とみなすだろう。そこでその人について考え始めるかもしれない。あなたは手か心で作られた故人の写真を所持するかもしれない。しかしそんなものであなたの心を満たすならば、愛のための空地を残さ

ないことになる。あなたが友人と一緒にいるときは相手については考えない。すでに消滅している光景や体験を思考が再現させるのは友人のいないときだけである。過去のこの再生が愛と呼ばれている。それゆえ、われわれのほとんどにとって、愛は死であり、生の否定である。われわれは過去や故人とともに生きている。それゆえわれわれはその状態を愛と呼ぶけれども、実はわれわれ自身が死んでいるのである。

思考の過程は常に愛を拒絶する。感情の混乱をひき起こしているのは思考であって愛ではない。思考は愛にとって最大の障害である。思考は〝現在あるもの〟と〝あらねばならぬもの〟とのあいだに分裂を作り出す。道徳はこの区分に基づいている。しかし道徳も不道徳も愛を知ってはいない。社会的な関連を保つために心によって作られたこの道徳なるものは愛ではなくて、セメントの凝固に似た硬化過程である。思考は愛に通じないし、愛を培養もしない。なぜなら愛は庭の木のように栽培できないからである。愛を培養しようという欲求そのものは思考作用である。

あなたがかりにも目覚めているならば、あなたの生活で思考が重要な役割を演じていることがわかるだろう。思考は自らの場所を持っているが、愛とは全然関係はない。思考に関係あるものは思考によって理解することができるが、思考に関係のないものは心によって捕えられない。あなたは尋ねるだろう。「それでは愛とは何か？」と。愛とは思考のない存在の状態である。しかし愛の定義そのものは思考の過程なので、それは愛ではない。

われわれは思考そのものを理解しなければならない。そして思考によって愛を捕えようとしてはいけない。ただし思考の否定は愛をもたらさない。思考の深い意義が充分に理解されるときにのみ、思考から解放された自由がある。このためにはむなしい理論でなく、深い自覚が基本となってくる。

冥想すること。ただし経典の反復はいけない。知覚すること。ただし定義してはいけない。そうすればこれらは思考の方法を悟らせる。思考の方法に気づくことなく、それを体験しないままでは、愛はあり得ない。

儀式と改宗

大きな境内のなかの生い茂る木々のあいだに教会があった。有色人も白人もそのなかに入っていた。内部にはヨーロッパの教会よりも多量の光がみなぎっていたが、諸準備は同じだった。儀式は進行中で、そこには美があった。終了したとき有色人で白人に話しかけた者はほとんどいなかったし、白人側も話しかけてはこなかった。出席者はみな異なる態度を持していたのである。

別な大陸には寺院があり、一同はサンスクリットの詠誦歌をうたっていた。ヒンドゥーの儀式プジャが行なわれていたのである。その集会は別個な文化的要素を帯びたものであった。サンスクリット語の調子はあたりによく通り、力強く、奇妙な重厚さを持っていた。

あなたは或る信仰から別な信仰へ、或る教義から別な教義へ改宗することはできるが、真理の理解へ転向することはない。信仰は真理ではない。自分の心や意見を変えることはできるが、真理または神は確信ではない。真理への転向はいかなる信仰または教

義、いかなる古い体験にも基づかない体験である。あなたが信仰から生まれた体験を持っているならば、あなたの体験はその信仰の条件づけられた反応なのである。あなたが思いがけず自然に一つの体験を持ち、次々と体験をつみ重ねるとしても、その体験は現在との接触に反応するところの記憶の連続にすぎない。記憶は常に死んでいて、生きている現在との接触においてのみ生き返るのである。

改宗とは或る信仰から別な信仰へ、または或る教義から別な教義へ、或る儀式からもっと大きな満足を与えてくれる儀式へ変わることである。しかしそれは真理へのドアーを開かない。それどころか満足は真理にとって障害となる。しかるに満足こそ宗教の団体やグループが信者に与えようとしているものなのである。もっと道理にかなった、または不合理な教義、迷信、希望などにあなたを転向させるためである。彼らはあなたに立派な鳥カゴを差し出す。それはあなたの気性に応じて快適かもしれないし、そうでないかもしれない。しかしどっちみちそれは牢獄である。

宗教的にも政治的にも、異なる文化水準層で、この改宗は常に行なわれている。指導者をいただく各団体は、宗教にせよ経済問題にせよ彼らの差し出すイデオロギーの型のなかに信者をはめ込んで繁栄している。この過程のなかに相互利用がある。真理はあらゆるイデオロギーの型、恐怖、希望の外側にある。あなたが真理の至福を発見しようとするのなら、あらゆる儀式やイデオロギーから脱出しなければならない。

心は宗教や政治の型に安全と力とを見い出す。しかしこれこそ団体にスタミナを与えるものなのである。そこには常に頑張り屋や新参者がいる。これらが自己の財産や所有物を投げ出して団体を維持し、団体の権力と威信が、成功と世才とを熱望する人々を引きつけるのである。古い型はもはや満足させてくれず、生命を与えてくれないことを心が見い出すとき、それは他のもっと心地よい強力な信仰と教義に転向するようになる。ゆえに心は環境の産物であり、種々の感情と同化作用の上にそれ自体を再生し、支えている。だからこそ心は行為の律、思考の型などに執着するのである。心が過去の結果であるかぎり、それは決して真理を発見することはできないし、真理を出現させることもできない。団体にすがりついているあいだは、心は真理の探究を放棄するのである。

たしかに宗教上の儀式は、参会者に心地よく感じさせる雰囲気を提供する。集合的、個人的儀式のいずれも心に或る静けさを与える。それらは毎日の単調な生活とは異なる、活力に満ちた著しい相違を与える。儀式にはかなりの美と秩序があるけれども、根本的には興奮剤なのである。そしてすべての興奮剤がそうであるように、儀式もやがては心をだらけさせるのである。儀式は習慣となり必要物となっている。人はそれなしにはすまされない。この必要物は霊的な蘇生、生活に直面するための力の集積、定期的な冥想とみなされている。しかしこの過程をもっと子細に観察するならば、儀式は自覚からのすばらしい逃避を与えるところのむなしい反復現象であることがわかる。自覚すなわち悟りがなければ、行為はほとんど意味を持たない。

経典や祈りの文句の反復は、しばらくのあいだ刺激剤とはなるけれども、ついには心を眠らせる。この眠い状態において種々の

体験が発生するが、それは自己投影である。いかに満足しようとも、こうした体験は幻影である。真理の体験はいかなる経文の反復、修などからも得られない。真理は終了、結果、ゴールではない。それは招かれざるものである。それは心に関する物事ではないからである。

知　識

われわれは汽車を待っていた。それは遅れていた。プラットフォームは汚くて騒がしかった。われわれと同様に多数の人が待っていた。子供たちは泣き、一人の母親は赤ん坊に乳を飲ませていた。売り子は品物の名を叫び歩き、茶やコーヒーが売れていて、全く騒然たる光景を呈していた。われわれはプラットフォームをあちこち歩きまわり、自分たちの足どりや周囲の生命の躍動を見つめていた。すると一人の男が近づいて来て、へたな英語で話し始めた。彼はわれわれを注視していたということで、話しかけたい衝動にかられたと述べた。さわやかな気分で、「自分は新しい生活を始めるつもりであって、いまからタバコをやめるのだ」といった。人力車の少年車夫だったので教育は受けなかったという。強そうな目付きをしていて、楽しそうな微笑を浮かべていた。

まもなく汽車が入って来た。車中で一人の男が自己紹介した。彼は高名な学者であり、多種類の外国語を知っていて、それを駆使して自由に話すことができた。かなりの年輩で、豊富な知識を持ち、裕福で野望的であった。彼は冥想について語ったが、それは自身の体験から話しているのではないという印象を与えた。彼の神は書物の神であった。生活にたいする態度は因襲的であり順応的であった。彼はむかし行なわれた〝強制的結婚〟や生活のきびしい戒律を正しいものと信じていた。彼自身のカスト（注。インドの特異な世襲的階級）や、各カストの持つ知的水準の相違などを意識していた。また妙なことに自分の知識や地位にうぬぼれていた。

太陽は沈みかけていて、汽車は美しい田舎を走っていた。牛たちは家路についており、黄金色の砂ぼこりがただよっていた。地平線上には大きな黒雲が現われて、遠方で雷鳴がとどろいていた。緑の草原は何という喜びをたたえていることか、うねり続く山のくぼみの村は何と楽しそうなことだろう！　すでに暗くなっている。一頭の大きな青いシカが野原で草を食べていたが、列車が轟音とともに通過しても知らぬ顔をしていた。

知識とは二つの暗黒のあいだにきらめく光である。しかし知識は暗黒の上に出るものではない。知識は、石炭のエンジンにたいするように、技術にたいして基本的なものである。しかし知識は未知なるもののなかへ到着することはできない。未知なるものは既知なるもののアミのなかに捕えられないのだ。未知なるものを捕えるためには、知識をわきへのけておかねばならない。だがそれは何とむつかしいことだろう！

われわれは過去のなかに自分の実体を持っている。そして思考は過去に基づいている。過去は既知なるものであって、過去の反応は常に現在すなわち未知なるものに影を投げている。未知なるものとは未来ではなく現在なのである。未来とは不安定な現在を通じて自らを押し出す過去にすぎない。このすき間は知識という

断続的な光で満たされ、それが現在という空所を補うのである。しかしこの空所は生命の奇跡を保っている。

知識にたいする熱中は他のものにたいする熱中と異ならない。それは空虚さ、淋しさ、失敗の恐怖、とるにたりない人間であることの恐怖から逃避を与えてくれる。知識という光は微妙な覆いであって、その下には心が浸透することのできない暗黒がある。心はこの未知なるものに恐れるので、知識、学説、希望、空想などのなかへ逃げ込む。それで知識そのものが未知なるものの理解にとって障壁となるのである。知識をわきへのけることは恐怖を招き、人間の持つ唯一の知覚の道具である心を否定することであり、悲しみや喜びを受けやすくすることである。しかし知識をわきへのけることは容易ではない。無知であることは知識をまぬがれたことにはならない。無知は自覚の欠乏である。そして知識は自我の態度の理解がない場合の無知なのである。自我の理解は知識をまぬがれる。

集積の過程、累積の動機が理解されるときにのみ知識から解放され得るのである。貯えようという欲求は確保し安定させようとする欲求である。他との同化作用、非難や正当化などを通じて確実性を求めようとする欲求が恐怖の原因なのであって、それが深い内省のすべてを破壊する。深い内省があれば蓄積の必要はない。蓄積は自己閉鎖的抵抗であり、知識はこの抵抗を強化する。知識にたいする崇拝は一種の偶像崇拝である。それはわれわれの生活の闘争や悲惨を解決しない。知識というマントは絶えず増加する混乱や悲しみからわれわれを決して解放することはなく、むしろわれわれを包んでしまうのである。

〔編者注〕

ジッドゥー・クリシュナムルティーは一八九七年南部インドのマダナパルで生まれました。バラモンの家族の八番目の子供です。一九〇九年に英国人チャールズ・リードビーターが、河中で水浴をしていた少年のクリシュナムルティーとその弟を見つけて、彼らに話しかけ、自分のバンガローへつれて行き、そこでクリシュナムルティーが〝新しい世界の指導者〟としての素質を持っていることを発見しました。当時リードビーター氏は、後にクリシュナムルティーの面倒をみることになった神知学協会のアニー・ベサント夫人の協力者であり、その協会のリーダーの一人でした。リ氏がクリシュナムルティーについてベサント夫人に説得したため、彼女は少年の保護者となり、その後クリシュナムルティーは英国へ送られて高等教育を受けながら成長しました。一方インドではこの〝新しき指導者〟を支援するために〝東方の星協会〟が設立され、そのメンバーはほとんど神知学者でした。そしてクリシュナムルティーの広範囲に及ぶ講演旅行が続きます。しかし一九二九年八月にクリシュナムルティーは神知学でかためられた〝東方の星協会〟を解散させ、「真理は道なき土地である。既成宗教や宗派の道を歩んでいては真理に到達することはできない。絶対的な無条件の自由をこそ人間は求めなければならない」という声明を発して、以来単独で啓蒙活動を続けており、現在は米国のケァリフォーニァ州に在住しています。

テレパシー講座 3

C・A・ハニー

第三課

本講座の第一課及び第二課には、過去数世紀間の各種の教えに見い出される基本的な要素が述べられていました。それらの要素のなかには一見して奇妙に思われるのがあったかもしれません。なぜなら、そうした要素は一般人の目立たぬ所に隠されていましたし、哲学や普遍的な知識を教える指導者でそれを明るみに持ち出した人がほとんどいなかったからです。第一課及び第二課で述べられたその基本的な事柄は今後更に詳細に解説されることになっています。先へ進むにしたがって読者の理解力を増すのにきわめて重要であるからです。

無数の想念や印象が絶えず人間の脳ずいを通過しています。しかし通常われわれはそれに注意を払いませんし、それらのほとんどに気づくこともありません。実際、大抵の人々は想念・印象が脳中を流れていることをあたまから否定するでしょう。きわめて強烈な想念・印象以外に注意を向けようとしないからです。

印象類を聴きとることをマスターせよ

ここで印象類を〝聴きとることをマスターする〟という場合、肉体の耳で聴くというのと同じ意味で〝聴く〟という言葉を用いるのでないことはおわかりでしょう。ここでは、自分の心のなかを流れる印象類に注意を払うことを習得せよという意味で用いてあります。あなたは心のゆったりとした状態を保つように努力しなければなりません。これは印象類が意識の層に浮かび上がって来て本人から気づかれるようにするためです。

印象というものは各種のチャヌル（径路）からやって来ます。一つの源泉だけから発生するのではありません。印象類のなかには高尚な有益なのもあれば、自分ほどに発達していない低級な源泉から発して、明らかに何の足しにもならないような望ましくないのもあります。望ましいのと望ましくないのとの両方にわたる実際の源泉が何かということについては、本講座でいずれ詳細に述べることにしますが、ここで大切だといえるのは、自分が受ける印象類が自分の進歩に役立つか、それとも望ましくない源泉から来たものか、といったことを見きわめるために、それらを意識的に分析してみることが必要であるという点です。この段階においては、自分の理解力に応じて、感受した印象類を普遍的、宇宙的なもろもろの理念に比較してみることによって分析することができます。

もちろん人々のなかには他人よりも異なった低い理解力を持つ

人があるでしょう。そのために誤りをおかすならば、その誤りという体験から新たに何かを学びとればよろしいのです。そうすれば本人は進歩し続けます。あなたが理解している宇宙の法則と融合した印象を感受するならば、それに従いなさい。或る一つの印象に注意するたびごとに、あなたは印象類を感受する能力を高めることになるのです。反対にそれらを投げ捨てるならば、あなたは感受力を妨げることになります。

想念はエネルギーまたは力である

今日大抵の人は想念がエネルギーまたは力であることを知っています。ですから、想念の性質を理解するために、われわれはエネルギーまたは各種のフォース・フィールド（力場）の性質、特に自然界に見い出される吸引と反発の性質について少しばかり知っておく必要があります。これと同じ力は磁石、磁界などにも見られます。

それで、本講座をこれから理解するのに必要な土台を与えるために、この講座の本論に入るのをしばらく中止して、右の件について少し研究することにしましょう。特に次の事柄について基礎的な知識を身につけておきたいと思います：電気、エレクトロニクス、原子核物理学、磁石、磁場、磁気、電荷、物質の性質、静電学。

電荷、物質、静電気

電荷の性質に関する基礎的な概念を得るために、われわれは原子自体を追求する必要があります。ここに出された各解説はある程度月並になっていますが、これは大抵の読者がすでにこれらの事柄について多少とも知っていると思われるため、月並な説明によって混乱を防ごうというわけです。

電気（注。電荷といっても同じ意味）には二種類あります。プラス（陽）の電気とマイナス（陰）の電気です。理論上からいえば、プラス、マイナスの電気とも電気を持ったきわめて小さな粒子ともいえます。二種類の電気のあいだの唯一の相違は、一つはプラスといわれ、他方はマイナスといわれていることです。このことは粒子が電荷を持っているともいえます。どちらがプラスの電荷を持ち、どちらがマイナスの電荷を持つかは、全く任意の根拠に基づいて決定されます。プラス及びマイナスという語は、両者が相反するという以外にさほどの意味はありません。両者間には持ち前の相違はないのであって、ただ同じような環境のもとに置かれた場合、その振舞いが異なるというだけです。

プラスの電荷を持った粒子（原子のなかで）はプロトン（陽子）と呼ばれ、マイナスの粒子はエレクトロン（電子）と呼ばれます。われわれに最も関係が深いのは電子であって、テレパシーの基礎理論や各種の超自然現象、心霊現象などを説明するのに、今後この電子が顔を出してきます。

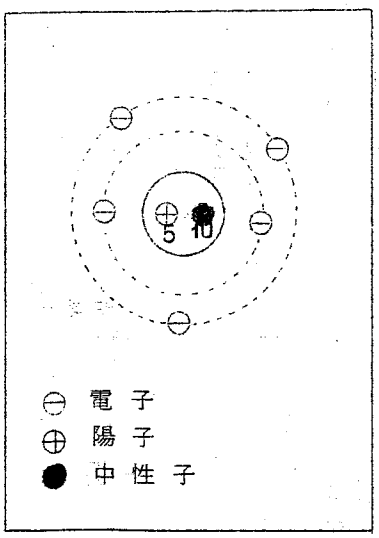
現在の原子構造理論によれば、あらゆる物質は原子、分子などから成り立っているといわれています。極端に小さな粒子であるニュートリーノ（中性微子）もこれに含まれます。ここでは一応電子、陽子、原子核を調べることにして、その他のものはすべて

省略することにしましょう。

〔法則1〕 同種類の電気は互いに反発し合い、異種類の電気は互いに引き合う。

いまかりに二個の電子をとり上げて二つをすぐ近くに置きますと、ちょうど二個の棒磁石の同名の極を近づけたのと同様に、互いに反発し合います。両方の電子が相手を押しやるわけです。そこで同種類の電気は互いに反発し合い、異種類の電気は互いに引き合うことがわかります。同じように二個の陽子が接近して置かれるならば、それは互いに反発し合います。ところが一個の電子をとり上げて一個の陽子の近くへ置きますと全く異なる現象が起こります。すなわちきわめて強力な〝引き合い〟が両者間に発生します。そして二つは一体となり、それぞれの異なる電気は互いに打ち消し合って中性の粒子になります。右の二つが個々に大きな電荷を持っていても、合体して一つになれば、すでに電気的には中性となります。定義によれば、その二つは一個の中性の微粒子になったわけです。これらの数個が結合して存在することがあって、こうしたことが各原子の中心部に起こっています。この場合には原子核という新しい名前が用いられます。一つの核は中性の粒子（複数）から成っており、各中性の粒子は一個の電子と一個の陽子から成っていて互いの電荷のバランスを保っています。

中性の粒子（複数）すなわち各原子の中心部の核に加えて、電子によってバランスの保たれている数個の余分の陽子が存在することがあります。その場合、電気的に原子のバランスを保つために、核のまわりを余分な電子がまわっています。その電子の群れはちょうど太陽系の惑星のように核のまわりを運行しています。もし核の周囲をまわっている電子の総数が核のなかの陽子の総数と等しければ、その原子全体は中性であって、電荷を持たないことになります。



第1図

第1図では仮定の或る一個の原子を表わしています。中心の円は原子核を表わし、この場合は五個の陽子と十個の中性子から成っています。十個の中性子は十個の電子と十個の陽子からできています。中性子はすでにバランスを保っていますから、これは省略することにして、バランスのとれていない陽子に目を向けることにしましょう。この仮定の例においては五個の陽子が存在しています。これは核自体が全体にプラスの電荷を持っていることを意味します。そこでこれらの粒子を表わすために図中に記号を用いることにしましょう。丸い黒点は中性子、プラス（＋）をかこむ円は陽子を、マイナス（－）をかこむ円は電子を意味します。

記号の下につけてある数字は各粒子の数を表わしています。数字がつけてないのは一個を意味します。さて次へ進みましょう。

イオンとは何か

第1図の原子核は余分な五個のプラスの電荷を帯びた粒子を持っていることを示しています。この原子全体のバランスを保ち、原子を電気的に中性にするために、五個の電子が原子核のまわりをまわっています。これらの電子は、たとえ五個の余分な陽子と一緒に原子核内にいなくても、陽子とバランスを保っていて、原子全体を中性にしています。

ところがもし外側の軌道から電子一個を取り除いて四個だけにしてやれば、原子全体は中性とはなりません。原子核内に一個分ほど過剰のプラス電荷を持つことになります。このように原子核内に一個分またはそれ以上の過剰のプラス電荷を持った状態にある原子は〝陽イオン〟と呼ばれます。反対に原子核の周囲の軌道に六番目の電子を一個つけ加えたならば、その原子は電子一個分の余分なマイナスの電荷を持つことになって、それは〝陰イオン〟と呼ばれます。そこで次のような定義ができます。

〔電子〕　マイナスの電荷を持つ粒子。

〔陽子〕　プラスの電荷を持つ粒子。

〔イオン〕　電荷を持つ原子。

〔陽イオン〕　電子の数よりも多くの陽子を持つ原子。

〔陰イオン〕　陽子の数よりも多くの電子を持つ原子。

〔原子〕　本来電気的には中性のもので、等しい数の陽子と電子を持つ原子。

学説によりますと、自然界のさまざまの元素間に見られる唯一の相違は、各原子の電子、陽子、中性子の数にあるといわれています。たとえばアルゴンは十八個の陽子と二十二個の中性子から成る原子核を持っていて、その周囲の軌道には十八個の電子があります。ヘリウムは原子核内に四個の粒子があり、その内訳は二個の陽子と二個の中性子となっていて、その二個の陽子の電荷とバランスを保つために周囲に二個の電子を持っています。

ここでイオンの例をあげてみましょう。右でヘリウムについて述べましたが、ヘリウムの陰イオンは、それが軌道に二個の電子のかわりに三個の電子を持つものを意味します。この余分な一個の電子はヘリウムイオンに電子一個分のマイナスの電荷を与えます。次にほう素（注。非金属元素。記号B。番号5）の陽イオンを考えてみましょう。その原子核は五個の陽子と六個の中性子を含んでいて、周囲には三個の電子がまわっています。この結果、全体の電荷はプラスとなります。というのは原子核が電子とつり合わない過剰な二個の陽子を持っているからです。

ほとんどすべての電気的な現象は電子の動きによるのであって、陽子によるのではありません。この理由は簡単です。電子は、それを引きつけている原子核から莫大な距離をへだてて存在します。ただしこれは相対的にいってのことです。（注。一個の原子を一兆倍の大きさに考えると、原子核は豆粒くらいの大きさの球になり、それを中心に半径百メートルの球を考えると、それが原子の大きさになる。その範囲内に数個あるいは数十個の豆粒ほどの電子が存在する。原子はこのようにガラアキなのである）したがっ

て電子を軌道から追い出して種々の目的に利用することは容易です。

しかし原子核内に存在する各粒子はしっかりと結びつけられていますので、すさまじいエネルギーを用いないかぎり、それらを追い出すことはできません。これは原子炉を利用すればできますが、大変な費用がかかります。しかし電子は懐中電燈用の電池ほどの簡単な器具を用いて導体（銅、アルミニウムなど）の原子の周囲の軌道から引き離すことができます。

原子核に接近した位置にある電子を引き離すことは困難ですが、物質によっては数個の電子が原子核からうんと離れているのがあります。これは電気の導体と呼ばれています。しかるに原子がたくさん集まってもどの電子も原子から離れようとしない物質は電気の絶縁体といわれています。たとえば導体として広く用いられている銅について考えてみましょう。銅は各原子核の周囲に二十九個の電子を持っています。アルミニウムも電気の良導体ですが、これは十三個の電子を持っています。

これらの電子の一個を引き離すにはただ一つの陽電荷を持つものを必要とするだけです。電池の陽極と陰極を銅線の両端につなぐならば、陽極はそれに最も近い原子から電子（複数）を引き寄せます。するとそのためにできた〝空席〟をおぎなおうとして他の原子が自分の電子をゆずってやります。そしてこの現象が連鎖反応的に銅線中に伝わりますと、これが銅線中を流れる電流になるのであって、これはいわば導体を流れる電子の運動であるわけです。

帯電に関する興味ある現象

帯電に関する法則を調べてみますと種々の興味ある事柄がわかります。かりに一ガロンの量の電子を集めて平たい円板の上にばらまくとしますと、それは円板全体に等しくひろがるでしょう。各電子間の距離は等しくなるはずです。この場合、バランスのとれた状態が存在するわけです。というのは各電子は隣接した電子にたいして反発力を用い、物理的に可能なかぎりの距離を保って他の電子から離れるからです。

一個の中空のボールの表面に同じことを試みるとしましょう。やはり等しい間隔の配置現象が起こるでしょうが、ただしこれはボールの表面のみに見られる帯電です。ボールの内部は電荷を持たない中性の状態になります。こんなふうにして電子を集中させるとき、それを静電気の帯電といいます。これは電気が静止した状態にあることを意味します。電荷を持つ物は同種の電荷を持たない他の物に引き寄せられます。この吸引を起こすのに金属でなければならぬということはありません。ただ必要なのは二つの物体間に存在する陰陽の相違です。

静電気が起こす興味ある例

あなたが自動車のなかに座って金属製のドアーの取っ手に触れても何も感じません。ところが座席上をすべって取っ手に触れると、かすかながらも火花が飛んであなたは電気のショックを感じることがあります。これはあなたが座席上をすべったときに衣服

がマサツによって大量の電子をため込み、それがあなたに大きな陰電荷を帯びさせることになるからです。それはからだ全体に〝たまる〟のです。その取っ手はやはり中性の状態にあって、もしそれが電荷を持ったとしても人体のそれよりははるかに弱い電気です。そのために、あなたがドアーの取っ手に触れると電子はそれを通過して、あなたのからだと車のいずれにも電気的にバランスのとれた状態にしようとするわけです。その際の電気的なショック、火花、パチパチという音などはこうした運動の自然の結果です。（注。これは米国などの空気の乾燥した地方でよく起こる）

右のような場合に車の電子がたまって過剰となり、あなたのからだから電子が除かれたとしてもやはり同じ現象が発生します。あなたのからだはマイナスのかわりにプラスになるのですが、結果は二つの異なる電荷が等しくなろうとするので右の例と同じことが起こるのです。

電荷がプラスになるかマイナスになるかを何が決定するか

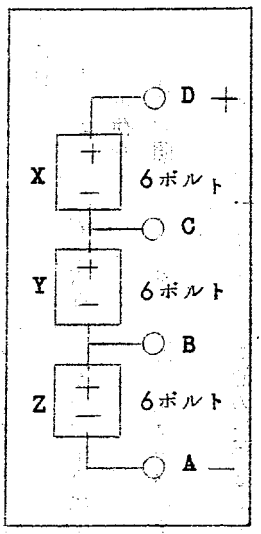
右の例のようにマサツによって発生する電気がプラスになるかマイナスになるかは、マサツし合う二つの物体の分子の性質によってきまります。たとえば絹でガラス棒をこすりますと、ガラス棒は電子を失ってそのために陽電荷を持ちます。一方、絹は電子が過剰となって陰電荷を持つことになります。ところが同じガラス棒を石綿でこすりますと、この逆の現象が起こって、ガラス棒は電子を引き寄せてマイナスの電気を持ち、石綿はガラス棒に電子を与えたためにプラスの電気を帯びます。同様に、あなたが車の座席上でからだをすべらせるとき、あなたが電子を引き寄せるか失うかをきめるのは、座席のカヴァーとあなたの着ている衣服の材質なのです。

以上述べた事柄によって一つの要点が引き出されます。すなわち電気の性質は多くの条件次第できまるということです。すべての条件を満たす決定的なルールというものを述べることはできません。また、二個の物体が過剰な電子を持っていますと、おのおのは陰電荷を持っているといえますが、二つを並べて置いた場合、一方が他方よりも大きな陰電荷を持っていれば、他の方へ電子をゆずり渡します。したがって二個の陰電荷を持つ物体間に吸引の現象が起こることは明らかです。これは、異種の電気は引き合い、同種の電気は反発するという法則に矛盾することになるようですが、そうならないのです。これは自然の相対性の例です。同じ陰電荷を持つ物同志でも、小さい陰電荷を持つ方は大きい陰電荷を持つ方に比較して実際には陽電荷を持つことになるのです。

相対的または相対性という言葉の意味

かりに私が或る書物の一節を参照するとしましょう。そしてその一節に関して意見を述べるとします。このようにして意見を述べる場合、私はその書物に関連した意見を述べているわけです。それゆえもし私が「或る電荷が他の電荷に対して陽電荷である」というならば、それはあくまでも他の電荷に関連させた上でのことか、または他の電荷に比較した上で「陽電荷である」という意味にすぎません。この場合の〝他の電荷〟は唯一の比較対照物で

す。



第 2 図

第2図のなかでX、Y、Zはそれぞれ六ボルトの自動車用バッテリーです。ボルトという言葉はバッテリー中の電荷の強さかまたは引っぱる力の強さを表わす言葉です。いまこれらのバッテリーを図のようにつないで、測定用にターミナル（端子）をつけておき、それをA、B、C、Dとします。

さて端子Aを標準にしてAに関する事柄を少し述べてみましょう。BからAまでの電圧を測定してみますと六ボルトと出てきます。これは二点間の電子の量の相違です。これはBがAに比較して電子が不足していて、Aよりも六ボルトほどよけいにプラスになっている（いいかえれば、より小さなマイナス）ということになります。

本講座を正しく理解するためにこのことはきわめて重要ですから、再度申しますと、AはBに比較した上で、またはAに関連してプラスであるということになります。

こんどはCからAまでを測ってみましょう。CはAに比較して十二ボルトほどプラスです。なぜならCは各電池（電池Aと電池Z）の電気を含むからです。この電気の両方ともAからCまでのあいだに存在します。このために電池Yは電池Zと直列につないであるといいます。

同じ考え方に従って、DはAに関して十八ボルトほどプラスになっているといえます。しかしDからCまでを測定するとどうなるでしょうか。DはCに比較して六ボルトだけプラスです。そこでCはDに比較して六ボルトだけマイナスであるといっても差し支えありません。どちらの表現の仕方も意味は全く同じです。ただ比較対照物または観点が変わるだけです。

Cは、われわれが他のいずれの点を比較対照物として選ぶかによってプラスにもなればマイナスにもなります。CはBに比較してプラスであり、CはDに比較してマイナスです。BはCに比較してマイナスですが、Aに比較すればプラスです。わかりにくければよく考えてみて下さい。第2図をごらんになれば容易に理解できるでしょう。

フォース・フィールド（力場）とは何か

いま一個の磁石と一かけらの軟鉄があるとします。この二つを近づけますと互いにしっかりとくっつくことがわかります。ところが両者間を少し離したまま固定しておきますと、そのあいだに引っぱろうとする力が存在します。磁力線という言葉はこの運動を表わすためにつけられたものです。この磁力線はちょうどゴムヒモでつないだ二個の物体を引き離したのと同じように働きますので、磁力線がまるでゴムヒモと同じように引っぱろうとしている有様を知ることができます。右の二個の物体間にできた磁引力

はフォース・フィールドとも呼ばれています。

多くの異なるタイプのフォース・フィールドが存在しますが、それらは右の伸ばされたゴムヒモに似た力線と考えられます。しかしフォース・フィールドは必ずしも二つの異なる物体間の引っぱる力とは限りません。一個の電子が動くと、それは周囲に小さなフォース・フィールドを生み出します。針金のなかを電流が流れると、針金のまわりにフォース・フィールドができます。このフィールドは数千マイルの彼方にまで到達することができます。ラジオやテレビの放送は針金すなわちアンテナからフォース・フィールド（注。電気波と磁気波）を空間に送り出して行なわれます。電界や電磁場は、本来右に述べた考え方に類似したフォース・フィールドにつけられた名前です。

要　約

◎電界や電磁場は力線からできていると考えられる。

◎どの力線も一方の端はプラスの電荷を持っており、他の端はマイナスの電荷を持っていることがわかる。各線は常に引っぱろうとする力の方向に従う。

◎力線は伸ばされたゴムヒモが縮まろうとするかのように働き、プラスとマイナスの電荷をつなごうとする。

◎或る電荷は他の比較対照となる電荷に関連してプラスにもなればマイナスにもなると考えられる。

◎二種類の電気が存在する。一つはプラスで他の一つはマイナスである。同種類の電荷は互いに反発し合い、異種類の電荷は互いに引っぱり合う。

◎一個の電子が動くとき、そのまわりにフォース・フィールドが生じる。他数の電子が導体中を動くとき電流の流れを生じる。と同時に、その導体のまわりに電界ができる。一定の条件のもとでこの電界は数千マイルの彼方にまで到達する。こうしてラジオやテレビの信号が伝達される。きわめて広い意味でいえば、テレパシーもこれと同じ方法で行なわれると考えることができる。

この第三課は読者によって理解するのが困難であるかもしれませんので、次の第四課ではラジオの送受信の方法を説明します。そのあと、たぶん第五課からいよいよ想念の性質、心の性質、想念に関する知識などの解説を始めます。本課と第四課、第五課を、よく理解できるまで注意深く研究して下さい。

電気の基礎理論について詳細な知識を得たい方は、本講座以外に別な良参考書を入手して読んで下さい。特に電子の性質や磁界、電界などのフォース・フィールドについてよく理解しなければ、今後この講座を吸収するのが困難になるでしょう。しかし簡単にあきらめてはいけません。努力して研究を続けて下さい。そうすれば本講座を学んだ結果がやがてあらわれてきます。

―編集後記―

◎　アダムスキーの〝宇宙的真理と個人的真理〟はア氏が単独で発行している〝コズミック・ブレティン〟第二号に掲載された情報の全訳です。この情報誌は季刊で年四回発行となっています。別に〝生命の科学講座〟が出されていて、目下第三分冊まで到着していますが、これもいずれ紹介したいと考えています。

◎　三月三十日付でアダムスキーの秘書、アリス・K・ウェルズ夫人から編者宛に来た連絡によりますと、目下アダムスキーは米国東部を講演旅行中で、帰宅次第にア氏から手紙を出すだろうということでした。これは録音テープその他の件について当方から三月二十二日付で送った書簡にたいする返事です。

◎　ハニーの〝新しい概念を評価せよ〟は、決して聖書を誹謗するものではなく、それどころかその内容を重視しているのであって、クリスチャンの聖書にたいする誤った解釈を指適して書かれたものです。ハニー氏の説によれば、新約聖書は二千年前に発生した一種のコンタクトの記録なのであって、その内容はおよそUFO問題と予言で満ちているということです。実際そのように考えなければ解釈のつかない個所が多数ありますし、イエスは当時のコンタクティー（別な惑星の人間と接触した人）であったとみれば、あの不可解な記述に満ちた〝書物〟も俄然興味の対象になり、そこには現代に関連した重要な示唆も含まれているというものです。

◎　本号にはクリシュナムルティーの〝生活への助言〟を載せました。J・クリシュナムルティーはインドの生んだ大哲で、現代思想界の最高峰と目される一人ですが、どうしたわけか日本ではほとんど紹介されていません。円盤問題と直接の関係はありませんが、その哲学にはアダムスキーの宇宙哲学と一脈通じるものがあり、各国GAP間でも高く評価されていて、フランスのGAPリーダー、シュザンヌ・ソニエ女史はクリシュナムルティーの講演を親しく聴いたということで、そのときの模様を数年前に知らせてくれたことがあります。本号にはクリシュナムルティーの名著〝コメンタリーズ・オン・リヴィング〟中の数篇を掲載しました。

◎　今回から〝テレパシー講座〟の試験問題は本誌に載せないことにし、別紙に用意しましたから、解答用紙を希望される方はハガキで申し込んで下さい。

◎　難病で悩んでおられる方は神戸市兵庫区矢部町五三の巽直道先生が主宰しておられる〝新精神学会〟へ照会されるとよいでしょう。これは宗教団体ではなく、〝心の持ち方〟によって奇跡的に難病を治す精神科学の研究会で、多くの驚異的な治癒例をあげておられます。

◎　周囲の人たちが円盤の存在を信じようとせず、狂人視されて困る、といった手紙がよく来ます。こうした場合は黙して語らずという態度を保つのが賢明です。音痴にたいして音楽の美を百万だら話しても相手にわからないのと同様です。

◎　みなさま、ごたいせつに―。（久）

日本GAPニューズレター　1964　3月・4月

翻訳・編集　久保田八郎
発行人　日本GAP
発行所　島根県益田市益田古川
振替　松江二六三〇（久保田八郎個人名義）

通巻第21号

昭和三十九年四月十日発行

頒価一〇〇円・送料二〇円（一カ年分送料共七〇〇円）